

要約『農業農村開発の技術を考える』

【定義について】

「農業農村開発の技術」における「農業農村開発」は農業開発と農村開発を意味しており、「農業農村開発の技術」は農業および農村を開発するための手段と定義できる。農業農村開発工学あるいは農業農村工学は農業および農村を開発するための方法・システムなどを研究する学問のことを指す。

【農業農村開発の技術を把握するために】

農業を営む人々や農村に住む人々の生活に役立つような手段を導入・普及させるためには、かれらの本音を把握する必要がある。しかし、技術は文明として農業農村社会に導入することが出来ても、文化レベルでは導入が困難である。農業農村開発の技術者は、対象とする「農業農村社会の本音」と「適用可能な技術」との両方を知っている必要がある。

【日本の農業農村における技術の変遷】

昭和中期頃は隣村などの力を借りて田植えや稲刈りが行われており、村人間での交流も盛んであった。しかし、徐々に耕運機やコンバインなどの農業機械が導入され、農作業の方法が劇的に変化する一方で村人間の行き来も少なくなっていく。それまでは農業に関わることは農家が行ってきたが、農業機械のメンテナンスや修理は機械の専門家が行うようになり、また農家同士の問題解決にも農協が担うようになった。農業機械が普及し、農村には農業の後継者がいなくなり、耕作放棄地が増加していった。

【海外における開発】

前述した日本の農業機械化と、化学肥料の改良がコメの生産調整・減反政策につながった。この変遷を参考に、海外の農業農村開発を考えていかねばならない。なぜなら、急激な技術の導入は環境の破壊をもたらす、社会の混乱を招くこととなるため、バランスの取れた開発が必要とされるのである。対象国には既存の技術があり、その技術に立脚して社会が成り立っている。そこに新技術を導入することで何が起こりえるのか、技術者は農村に住む人々の本音を把握し、技術の導入方法を深慮し準備しなければならない。

【今後の展望 ICT と農業農村開発】

農業における先端技術として、GIS やドローンなどが利用されており、今後も様々な技術が導入されると予想する。導入する側としては、対象地域の現状を正しく分析し、どの技術をどの順番で普及させるべきかを考える必要はない。しかし、導入した技術が現地に根付くかどうかは、最終的にはそこに暮らす人々の判断に委ねられる。現地の伝統的な手法と最新技術が化学変化を起こし、その土地に適した新しい技術を生み出す可能性もあるかもしれない。農業農村開発の技術者は、現地の社会的ニーズを把握し、適切な技術を導入できるようなスキルを持つことが必要であり、その技術者の育成にも力を注ぐ必要がある。

【感想】

農業農村の変遷や ICT 活用について、いつも思い出すのが「下町ロケット」の話です。高齢化した農家、サラリーマンの息子、地元農協との関係、衛生を利用した無人耕運機など、農業とは縁のなかった自分も何となくイメージを持てるようになりました。ドラマであっても、日本の農村について身近に感じる機会があれば、農業に興味を持つ人々が増えて、多種多様なアイデアも集まり、よりよい技術が生まれる気がします。